

---

# 途中から始まる物語

彦星こかぎ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

途中から始まる物語

### 【Nコード】

N0290D

### 【作者名】

彦星こかぎ

### 【あらすじ】

僕の世界は雪になった……存在していたものが一つずつ消滅していくその白い街で、青年は少女に出会う。現実と幻想が絡まりあう不思議な物語。貴方はどう読み解きますか？

### (3) 降りすぎた雪の街

それが、いつのことなのか、僕はよく知らない。

ただその頃には、世界は固定的で安定していて、今ここに存在するものは別の力がなければ永遠にそこに存在し続けた。

いつしか世界は雪になった。降りすぎた雪を降らせすぎて、とうとう世界も雪になった。

僕はそれでも、雪の欠片を握り締めて生きている。

例えばそれは部屋の鍵。間違はなく世界が作り出したもので、間違はなく僕と世界をつなぎとめる欠片。

僕の世界は雪になった。

握った手をゆっくりと開くと、すっかり持っていたはずの部屋の鍵は、跡形もなく消えていた。

壊れてしまった世界の欠片はまだ少し指の隙間にあって、けれどもすぐに舞い上がって、世界に帰って行ってしまった。

僕の母さんはフラウロスに殺された。

名前も忘れた大人達が僕に教えた、数少ない事実がそれである。

「おい君、その首に提げている銀色のものは何だい？」

仕事場の気のいい隣人が僕に問いかける。

「こいつはロケットだよ。母さんの写真が入っているのさ」

「それはいい。きっと、大事にするといい」

「無論、何より大事にしているさ」

そうして僕達は仕事に向かう。

全員同じ、真っ白な上下を身につけて、静かに動く長いベルトコンベアに沿って、正確に並ぶのだ。

世界の欠片は一日であまりにたくさん壊れてしまうので、どうにか生活するには毎日たくさん新しいものを作り出さなければいけな

い。

「作り出せ、世界の欠片を！」

工場長が号令をかけ、

「作り出せ、世界の欠片を！」

僕達は一斉に両手を掲げる。

「決して壊れない、永続する欠片を！」

「決して消えない、丈夫な欠片を！」

「決して壊れない、永続する欠片を！」

「決して消えない、人のための欠片を！」

唱和しながら、僕達は世界から欠片を削り取っていく。両手の間にそれが十分集まると、また一斉に手を下ろしてベルトコンベアに乗せる。出来立ての白い何かは加工工場に送られていって、なにか少し役に立つものになるらしい。

「決して壊れない、永続する欠片を！」

「決して消えない、丈夫な欠片を！」

今日も世界には雪が降っていて、繊細で冷たい世界はゆっくりと対流している。僕達はまっすぐに伸ばした手と休まない唱和の中で、淡々とそこから欠片を作り出し続ける。動きを乱す事なく、全員が細部まで同じ動きをして。ただ作り出される白い欠片だけが、それぞれ違った形を保って、長いベルトコンベアの上を流れていく。

「決して壊れない、永続する欠片を！」

「決して消えない、人のための欠片を！」

そしてまた出来た欠片をベルトコンベアに乗せながら、僕はそれが何になるのか、まるで推測することが出来なかった。

#### (4) ひらかれない空間

帰り路の途中にあったポストが消えた。

遠くからもその姿はきちんと見えていて、ああよかった、ポストはいつも通りあったと安心していたのだが、それからふと目を離れた一瞬でもうポストは消えていた。それで僕は、手紙を持ったまましばらくの間動けずにいた。

一瞬前までは、白い姿に雪を纏って、別の場所への入り口を黒く四角くこちら向きに開けていたはずなのに、それはもう存在しない。そこに、少女がいた。彼女が僕に問いかける。

「その、首にかけているものはなあに？」  
尋ねられるのは二度目だった。けれど僕は、口を開かなかった。

少女はあたかもまだポストがそこにあるかのように、腰をかけたような姿で中空に浮かんでいた。しかしポストが完全に消滅してしまったことは、白いワンピースから出ている少女の足が大きく前後に揺れていることから明らかだった。

肌の色は薄く、好き放題に伸びた髪もひどく白かった。それも、ただ白色なのではなくて、背後が透けるほどに頼りなく見える。

少なくとも死ぬまでは壊れてしまわない人間と、それ以外の、あつという間に壊れて世界に戻ってしまう世界の欠片との僅かな境界を、少女は容易く超えてしまっているのである。

彼女はその細い指で、ひっきりなしに世界から欠片を取り出しては何かを作り出していた。

少女の細い指は軽やかに動き、その度に世界は心地よくほどけていく。ほどけた白い世界の欠片は、指が起こした風に乗って再びまとまり、今度は奇妙な生き物に姿を変えた。それらは色合いもまちまちで、取って付けたようにバランスの悪い突起物を無闇に動かしながら、ものによっては奇数であることすらある短い足を必死に前

後させて空中を動き回っている。大半は程なくしてまたほどけてしまいが、いくらか出来のよいものは少女の傍まで寄ってくる。

少女はその、耳の長い何かを軽く撫でてやりながら、じっと僕を見た。

「ねえ、なあに？」

少女の大きな瞳が、静かに潤んでいる。僕は沈黙が怖くて口を開ける。

「これは、……ロケットだよ。母さんの写真が入っているんだ」

「本当に？ 消えてはいない？」

それは、初めての質問だった。けれど、答えは用意されてあった。

「怖いから、しばらく開けていないんだ。だから、分からない」

「ふうん」

微笑して首を傾げると同時に、少女の透けるような髪が揺れた。

「じゃあ、あなたのお母さんは、存在しているのと消滅しているの混ざったところにいるんだね」

けれど僕はその言葉に、明確な意味を見出すことができなかった。

## (5) 見捨てられた白

「ははあん。君は、雪に惑わされたんだよ」

僕から話を聞いて、気のいい仕事仲間があっさりと言った。

「雪は人を惑わすのかい？」

「そうさ。知らなかったのかい」

「知らなかったな。雪なんて、ありふれているじゃないか」

「見過ごしてしまうようなものが、ときたまふいっと人を騙したりするものさ」

それでその話はおしまいになった。僕はまた仲間達と同じ白ずくめの服を着て、ベルトコンベアに並んだ。

「作り出せ、世界の欠片を！」

「作り出せ、世界の欠片を！」

そして僕が両手で作り出すものは今日も真つ白で、歪んだ球のような、適当に掴み取った粘土のような張り合いのない形をしていた。その歪み具合は決して人工的なものではなかったが、少なくとも生き物には見えそうになかった。

「決して壊れない、永続する欠片を！」

「決して消えない、丈夫な欠片を！」

少女は世界から欠片を紡ぎ出すとき、どうしていたただろうか。腕に触れる雪は、彼女の気を散らしはしなかっただろうか。それとも雪すらも、彼女には触れる事も出来なかっただろうか。

僕は、見た事のないものを想像する事ができない。

「決して壊れない、永続する欠片を！」

「決して消えない、人のための欠片を！」

そんなことを考えながらまた、両手の間に世界の欠片を取り出して、僕はまた仕事仲間たちと同時にそれをベルトコンベアに乗せようとした。

次の瞬間。

僕の両手に出来上がっていた歪んだ白い欠片は、突如として急激に膨れ上がり、ぐいぐいとその形を変え始めた。その勢いがあまりにも強くて、僕は斜め上に向けた腕を動かすことが出来ない。

騒ぎが周囲に広がっていく間に、世界の欠片は更に大きく膨らみ、とうとう薄い緑色を手に入れた。そのときにやっと僕は気付いた：これは生き物だ。首が長く伸び、太い足は五本、しっかりと生えている。その間にもそいつはどんどん大きくなり、雪の降る工場を覆うように影を広げていく。

そして長い尻尾の先が出来上がると、それは完全に僕の手から離れて、泳ぐような動きで空高く飛んでいってしまった。

工場の真っ白な仲間達が、微動だにせず、口を開けたままで立ち尽くしていた。

雪は絶え間なく降っていた。

そして、僕は同時に確信してしまった。僕が作り出した生き物の名前を、僕は理解してしまった。

あれの名前は、フラウロス。

僕はたった今、この瞬間に、母を殺した生き物を作り出してしまったのである。

そしてそれと同時に、ベルトコンベアが不意に消滅した。崩壊した世界の欠片が、みるみるうちに舞い上がり、流れ、姿を消した。

吹雪のようなその崩壊が収まったとき、そこにいたのは僕一人だけだった。

そして、雪すら降るのをやめた。

僕がその場に膝をつくとき、胸でロケットが揺れた。

そして少女は僕の目をまっすぐに見つめながら、おもむろに言った。

「何もなくなつたから、物語はおしまい」

僕は真っ白い服を着て、その何もない世界に膝をついて立っていた。無色の空を見上げると、フラウロスがゆっくりと旋回していた。

「何もない、わけじゃないよ？」

僕がそう言つて、胸に吊るした銀色のロケットを示すと、

「それは別。まだ開いていないから」

少女は笑つてそう言った。そして、もう僕を見ようとしなかった。

そのときフラウロスが、僕を目指して真っ直ぐに降りてきた。僕は少女に何か別れの言葉を言おうとしたが、フラウロスの曖昧な体が僕の口を塞いだ。

そのまま僕はフラウロスに混ざり合つて、真っ白い空へと高く高く昇つていった。

## (1) 動く夜の色

空の中で僕は、睡眠と覚醒を繰り返し、うつらうつらと日々を過ごしていた。

薄緑色のフラウロスはすっかり僕を溶かし込んでいて、常に自由に漂っていた。ただ、僕の思うことは大抵分かってくれるので、僕は時折フラウロスに声をかけて降下させ、下の街の様子を見に行つた。睡眠にも飽きてしまうことがよくあったのである。

その世界は最初のうち真っ白で、白いワンピースを着た、長い髪の少女だけがそこに立っていた。ところがしばらくすると、どこからか背の高い大人が数人、色とりどりの服を着て現れて、彼女を迎えに来た。すると、そこにはあつという間に小さな一階建ての家が建ち、少女と大人たちはそこに入ってしまった。家は可愛い赤色の屋根をしていた。

それからまたしばらくすると、家の周囲には広い道が生まれ、小さな車が作られ、さらに家が建てられていった。道が伸びると、そこには更に高いビルが出来上がり、列車が走り始め、また道を増やした。

薄黄色の小学校に、水色の病院。立派なオフィスビルにテレビ塔。一旦は張り巡らされた電線は、あつという間に今度は地下に潜つた。するとビルが並び、かと思えば建て替えられていく。どれもこれも立派で、すべてが色に満ち溢れていた。

そうやって次々に広がり、大きくなっていったその世界は、確実にいつまでも触れられるものだった。

世界は固定的で、安定していて、今存在するものは別の何かが壊

途中から始まる物語

さ  
な  
い  
限  
り  
永  
遠  
に  
存  
在  
し  
て  
い  
た。

(2)そして君には鎮魂歌を

どれくらいの時が経ったのかはよく分からない。けれど僕は、とうとう何もかもに飽きてしまつて、空から街へと降りていった。

寒い夜で、空はひどく曇っていた。列車ももう止まっているような時間帯で、街は静まり返っていて、何の音もしなかった。そしてフラウロスはそこに音もなく降りて、風も起こさずにビルの間をすり抜けていった。

ところが、それと共にフラウロスはだんだん小さくなり始めた。それによつて溶かし込まれていた僕の体が徐々に形作られていく。現れた僕は、何故かとても幼い姿になっていた。

僕の姿では飛べないので、僕は目の前にあつた小さな家に入ることにした。

今や都会となつたその街の中では随分小さいけれど、その家は街のほぼ中心にあつた。可愛い赤色の屋根のある、一階建ての家だ。

小さな窓が開いていたので、落ちそうになりながら部屋に入った。小さくなつたフラウロスはそこで、完全に僕の中に隠れてしまつた。

少女は部屋の中で立っていた。周囲は可愛い家具に満ちていて、棚にはあらゆる生き物の縫いぐるみが並んでいた。一方で機械にも興味があるようで、机の上では歯車の露出した銀色の時計が静かに針を動かしていた。

少女はそして、すっかり大人の姿になっていた。

白いワンピースは以前と変わらないけれど、それも長袖で丈の長い、スカートのあまり広がらないものになっていた。ぼさぼさだった長い髪はすっきりとまとまって、彼女の背中に流れている。背は幼い僕よりずっと高く、痩せているものの体格もしっかりとしていた。

彼女は、突然現れた僕をじつと見つめていた。

僕は口を開いた。僕は彼女が何であるのか、既に理解していた。

「母さん」

少女……今や僕の母となった彼女は、その言葉に目を見開くと、みるみるうちに涙目になった。

「ああ……やっぱり、そうなのね？ 私の子なのね？ ええ、そうだと思うっていたわ。産まれたら写真入りのロケットをあげようって、ずっと決めていたんだもの。そうよ、産まれてすぐに、私の顔も見ずに死んでしまうなんて、そんなことがあるわけないじゃない。ちゃんと産まれていたんだわ。そうに決まっていたじゃない……」

そうして母は姿勢を落とし、僕を抱きしめようとした。

僕もそれに応えようとしたけれど、そこですぐ母の腕に飛び込んだのは、僕ではなくて僕から出てきたフラウロスだった。フラウロスは母の胸にしがみつくと、再びどんどん大きくなり始めた。

「ああ、私の子……私の可愛い子。やっぱり、私に会いに来てくれたのね？ 自分でちゃんと、私を見つけたのね？ 偉いわ……ええ、大好きよ。あなたが大好き……」

母は歓喜の涙を流しながら、フラウロスを抱きしめた。そうするとフラウロスはますます大きく膨れ上がって、母に絡み付いて半ば包み込むようにした。母はそれでも我を忘れて、フラウロスを抱き続けた。今では母はフラウロスにすっかり覆われて、その境界もはつきりしなくなり始めていたけれど、それでも母は嬉し涙をこぼし続けた。

「なんて素晴らしいのかしら……あなたのために、新しいおうちを作りましょう。あなたが帰って来られる家よ。それから手紙を出して、あなたの事を皆に教えましょう。ああ、とても楽しみだわ……大きくなったらきつと、世の中の役に立つものをどんどん作るのでしょうね。それから……」

フラウロスに包まれた母は徐々に目の光を失い、明確な意識を失い、背の高い体を失っていった。

部屋に、雪が降り始めた。

雪は街全体にどんどん降って、大きな建物の群れを覆い隠した。視界が真っ白になると、雪に包まれたビルは音もなく消えて、世界に帰っていった。線路が消え、病院や学校が消えて、世界は白く変わっていった。その白い世界には、しかし、雪だけが絶え間なく降っていた。

赤い屋根が消え、柵が消え、一瞬間に浮かんだ縫いぐるみたちも順々に消えた。机が消え、時計が消えた。そして、雪だけが降り続いた。

僕の世界は雪になった。

それでも母は涙を流し、笑顔で語り続けた。フラウロスが曖昧な体で母を完全に包み込み、顔を覆い隠し、再び空高く飛んで行ってしまつまで、母は笑い続けていた。

そして、僕は白い世界に残された。

僕はしばらく、その世界にただじつと立っていた。すると、どこからともなく背の高い大人たちが現れた。全員が白い服を着ていて、僕に触れようとはせず、遠巻きに僕を見ながら、彼らはこう言った。「お前の母さんは殺された」

この物語は途中から始まったのだから、僕にとってはこれが物語の結末である。環は、完全に閉じてしまった。

おそらく僕は永遠にこれを繰り返すのだろう。ロケットは決して開けられない。だから、母が今、存在しているのか、消滅してしまったのか、そんな事はもうどうでもいいのだろう。

……それでも、と、僕は雪が降る空を見ながら考える。僕が確実にこの世に存在しないものであったなら、世界はまた違う姿になっていたのだろうか。

雪になった白い世界は、取り残された僕に何もしてくれそうにない。

大人は誰も教えてくれなかったけれど、僕の名前はフラウロスと  
いった。

## 存在しない終章に代えて

空の中で、私は雪の降る街を眺めていた。

私を包み込む薄緑色のフラウロスは、だけど決して私と混ざり合ったりはせず、常に私の視界を緑にするばかりだった。だから……真下に広がる街が、真っ白な雪で覆われていることは分かっているのだけれど、全体にかかるグリーンによって、どこか優しい雰囲気漂わせているように感じた。

だから、私はこの街が優しい街なのだと記述しなければならない。

世界には最初、いくつかのものが用意されていた。部屋の鍵、赤いポスト、それから工場。

それに、賢くてあどけない青年の姿をした、私の可愛い子……フラウロス。

私は彼を、私を包んでいるフラウロスを通してしか見ることが出来ない。

それはフラウロスが、彼の名前であり、この世界全ての名前でもあるからだ。

私にとっては全てがフラウロスだ。たとえそれが、本当に存在する世界だったとしても、突然現れた薄緑色の生き物が、私に見せている幻だとしても。

そして、フラウロスは間違いなく私が生み出したものだ。

何をどうやったがために生まれてきてくれたのか、私にも皆目分からないのだけれど。

私は青年について記述しながら、私の愛するものについて考えて

いた。

果たして私はあの青年を愛しているのだろうか。それとも、雪の降る白い……私にとっては薄緑色の、この街を愛しているのだろうか。

それとも、青年も世界も本当はどうでもよくて、私はただ曖昧な形をした、この薄緑色の「フラウロス」そのものだけを愛しているのだろうか。

ただ確かなのは、この世界の中心はここ、私のいるところ……フラウロスの中という事で、フラウロスそのものはここにしかない。その向こう側にあるのは、この名前と存在を形に表しているけれど、フラウロスそのものではないのである。

世界も、青年も。どちらも私が生み出したのだけれど。

世界は壊れ始めていた。ようやく終局を描くことが出来るかもしれない。

しかし私は記述をやめて、小さく呟く。

「この世界には登場人物が足りないわ」

フラウロスはその言葉に素早く反応した。体を捻って自分の体をちぎり、私を本体から切り離したのである。

私は薄緑色の皮膜に包まれたまま、幼い姿になって、消滅したポストの上に腰掛けた。

物語がかりそめの終わりを迎えるまで、ここにしよう。

秩序が続く限り、新たなフラウロスと出会い続けるために。

存在しない終章に代えて（後書き）

彦星こかぎです。

今年の中ごろに書いた話なのですが、最後の一説を加えてお届けします。

まったく………どういう意味がある話なのやら。

感想、批判をお待ちしております。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0290d/>

---

途中から始まる物語

2009年3月24日08時49分発行